

# 日本の古画作品の修理報告—教圓寺《阿弥陀如来図》の例

## The Restoration Works of Japanese old paintings, as an example of A Report on the Restoration Work at Image of Amida Nyorai owned by Kyoenji Temple

---

岩永てるみ・脇屋助作・磯谷明子

IWANAGA Terumi, WAKIYA Sukesaku, ISOGAI Akiko

The Institute for Conservation of Cultural Property at Aichi University of the Arts began its third year of operations in April 2016. Building upon a nearly forty-year track record in creating reproductions of traditional Japanese paintings, the Japanese painting department was the first to start operations. Therefore, most of the items that the Institute has dealt with till now have been Japanese paintings or calligraphy works.

In general, the guidelines and processes for repairing an item vary, depending on the materials that it is made of, the environment in which it was stored, and the degree of damage it has incurred. Consequently, the restoration experts choose techniques that they see as providing the best outcome for a given item. The support medium for the overwhelming majority of old Japanese paintings and calligraphy works is either paper or silk; thus, to a certain extent, the basic common processes are used to repair them.

In this paper, we will present the basics of repair processes for old Japanese paintings that we have used at the Institute, using as an example the painting of Amida Nyorai belonging to Kyōenji (a temple located in the city of Nagakute), which was repaired from 2014 to 2015. The report will include what we learned in the course of repairing this painting.

### はじめに

愛知県立芸術大学に設立された文化財保存修復研究所は、2016年4月で3年目を迎えた。この間既に7件11作品の修復事業を終え、今なお受け入れ作品の修理を継続中である。

過去四十年近くの日本画模写制作事業の実績から、本研究所も日本画部門が先行してスタートし、現在までに本研究所で取り扱う作品は、日本画や書作品が多い。

一般的に作品修理の方針や工程は、それぞれの作品の材質や保存環境、損傷具合等によって変わり、その作品にとって最善と考えられる処置が施される。日本の古画あるいは古書跡等の場合、支持体は紙か絹であることが圧倒的に多く、その基本的な工程はある程度共通する。

本稿では、現在までに本研究所にて行われた日本の古画作品の修理工程の基本的な部分について紹介するが、平成26年～27年に修理された作品《教圓寺蔵 阿弥陀如来図》を例に、修理において分かった事の報告を行う。

## 第一章 古画作品の修理工程について

以下に日本の古画作品修理の基本的な流れを示す。ただし、作品各点によりそれぞれの具合があり、必ずしもこの通りとは限らない。

### 1. 修理前調査

修理前の作品および付属品等の状況を調査する。調査には写真撮影（通常光・紫外線・赤外線、必要に応じて顕微鏡、X線等）と採寸記録を伴い、損傷地図や調書を作成する。修理前調査により、修理方針を練り、工程計画を立てる。

### 2. 解体

作品を本紙とそれ以外に解体する。それ以外の部分（表装裂・額縁など）についても修理が必要な場合は、本紙修理と並行して作業を進める。

### 3. クリーニング

本紙上に黴や虫糞などの粉塵が見られる場合は埃払いをする。その後浄水を本紙に噴霧して吸取り紙に汚れを吸着させる作業を何度か繰り返す。

### 4. 剥落止め

本紙に浮きや剥落が見られる場合は、作業前に剥落止めを行う。剥落止めには薄い膠水溶液を用いる。

### 5. 表打ち

旧裏打ち紙を除去する前に、本紙表面保護のため表打ちを施す。表打ちによって旧裏打ち紙を除去する時のリスクが軽減される。本紙の状態により、表打ちを行わないこともある。

### 6. 旧裏打ち紙除去

裏打ち紙が何層か（肌裏打ち紙・増裏打ち紙・総裏打ち紙など）重ねられているので、それらの全てを除去する。また旧修理が施されている場合、旧折れ伏せ紙（折れを軽減させるための補紙）や旧繕い紙（穴埋めなど）も除去する。最終的に本紙一枚のみにする。

## 7. 補填

本紙に欠損部分がある場合、補填をする。補填材は本紙に極力合わせる。補填部分が本紙に負担をかけないように注意する。

## 8. 肌裏打

本紙に最初の裏打ち紙を打つ。紙は楮原料の薄美濃紙。このとき接着剤は小麦粉正麩糊を使用する。

## 9. 増裏打ち（軸装の場合）

本紙に2層目の裏打ち紙を打つ。紙は美栖紙。このとき接着剤は古糊（小麦粉正麩糊を10年近く寝かせたもの）を使用する。

## 10. 補彩

本紙欠損部を補填した部分に、本紙と色調を合わせた補彩を施す。具体的な絵を描かず、全体の色調を損なわないように色味を合わせる。

## 11. 折れ伏せ入れ

本紙が折れていた部分または今後折れそうな部分に、補強のため薄美濃紙を細く切って貼る。接着剤は小麦粉正麩糊を使用する。

## 12. 付廻し

一旦仮張り板<sup>1</sup>に貼り、乾燥させた本紙を、表具裂などの各パーツと併せ、作品予定寸法に合わせて継ぎ合わせる。

## 13. 総裏打（軸装の場合）

継ぎ合わされた本紙及び表具裂に、最後の裏打ち紙を打つ。紙は宇陀紙。接着剤は古糊。

## 14. 仮張り

総裏打まで終わった作品を仮張り板に貼ってしばらく乾燥期間を置くことで、温湿度等の環境変化に慣れさせる。

## 15. 仕上げ

仮張り乾燥後の作品を仮張りから外し、軸首・軸木・紐等を装着させ、修理後予定の完成形に仕上げる。

16. 桐保存箱を新調して納入する（古画・古書跡については太巻添軸を作成する）。

#### 17. 修理報告書作成

作品それぞれの修理工程を整理し、修理前後写真を加えた報告書を作成、所有者へ修理完了した作品と共に納品する。

## 第二章 教圓寺蔵《阿弥陀如来図》修理報告について

平成 26 年（2014）8 月から平成 27 年 10 月にかけて、長久手市内の教圓寺が所蔵する《阿弥陀如来図》一幅の修理を行った。以下ⅠからⅢはその修理報告からの要点抜粋である。修理工程は第一章に示した流れで行った。

### Ⅰ 文化財の名称等

1. 名称・員数 絹本著色 阿弥陀如来図 一幅
2. 所有者 東砂山 教圓寺（愛知県長久手市）
3. 形式・寸法

	修理前	修理後	備考
形式	掛軸装（佛表装）	掛軸装（佛表装）	
本紙	縦 86.2cm×横 34.5cm	縦 89.1 ×横 35.8cm	
全体	表具丈 155.6cm×表具幅 56.3cm	表具丈 171.0cm×表具幅 55.2cm	
一文字	無し	無し	
中縁・風帯	黄土地蓮唐草文金襴	紫地小菱二重蔓中牡丹唐草文金襴	
総縁	紺地八藤文銀襴	松葉色小梅文高野裂（綾織裂）	
軸首	金軸	金軸	元使い （洗浄処理）
太巻添軸	無し	桐太巻添軸	
保存箱	木製被せ箱	桐屋朗箱	元箱天板（箱書） 底敷き

### Ⅱ 修理前状況

1. 本紙全体が黒く変色し、絵像の詳細が見辛くなっている。
2. 本紙に擦り傷、剥離、亀裂、剥落が見られ、複数個所の欠損が見られる。
3. 本紙に折れが多数発生し、そのいくつかの折れ山が摺れて亀裂や欠損が見られる。
4. 本紙に皺が生じている。また虫喰による欠損が見られる。
5. 本紙に旧修復による補填が確認できる。旧補修時に生じたと見られる皺がある。

6. 本紙絵像（阿弥陀如来像）の一周り外側が不自然な形で変色し、地の絹本に貼付したような痕になっている。
7. 旧繕い絹に補彩が施され、それがオリジナルの本紙絹にオーバーペインティングで色合わせされている。
8. 本紙裏の裏打紙に、糊の経年劣化による接着力低下が見られ、本紙が浮いている。
9. 表装裂に汚れや損傷が生じている。特に総縁部分の損傷が著しく、銀糸に変色が見られる。
10. 八双が失われている。表具仕立て時は拵えられていたと予想される風帯も無い。
11. 保存箱蓋裏に宝永年間の修理時の箱書きがある。
12. 保存箱内に別作品の八双と一緒に保管されている。
13. 保存箱に虫喰等の損傷が見られる。備付の紐が切れている。

### III 修理方針

- 本紙の肌裏除去を伴う解体修理を行う。本紙・表具裂にはそれぞれ新しい楮紙で裏打ちを行う。
- 本紙の煤出しを行い、汚れを除去する。
- 絵像（阿弥陀如来像）およびその一周り外側までの本紙部分を残し、それ以外の共裏（旧後補）部分は除去する。
- 除去された旧共裏部分に、新たに染色した絹布で絵像部分を除いた形で補絹をする。
- 新たに補絹をした箇所に、似合いの色で補彩する。
- 表具裂・軸木・啄木を新調し、掛軸装（佛表具）に仕立てる。
- 軸首は旧来品を洗浄して元使いする。
- 保存のための桐太巻添軸、桐屋朗箱を新調する。

## 第三章 修理によって分かること—教圓寺《阿弥陀如来図》を例に

### I 光学調査による本紙の状態調査

修理前調査の一つに斜光調査があり、本紙に斜光を当てると、より一層浮きや折れ、剥落箇所が分かりやすくなる。《阿弥陀如来図》においても著しくそれらの損傷箇所が目立ち、早急な修理の必要性を感じさせた。

さらに、本作品においては修理前から背景部分と如来像周りの不自然な差異が指摘されていたが、その該当箇所についても反射光によってその境目の色差

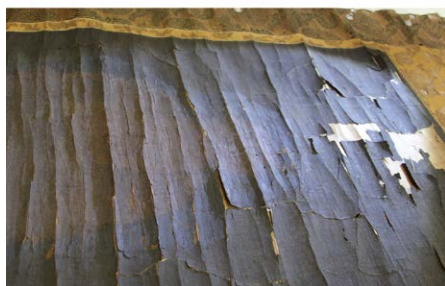


図1：斜光写真（修理前）



図2：赤外線写真（修理前）

がはっきりと示され、素材或いは工法の違いを十分に予測させた(図1)。

また、特別に赤外線を吸収できるカメラによって、《阿弥陀如来図》では、絵画の墨線がくっきりと浮かび、目視で見えなかった衣文線や面貌表現を捉えることが出来た(図2)。問題の不自然な背景については後世に黒く墨塗りされたと見られ、作画当初は描かれていたであろうはずの頭髮や、台座足元部分の詳細な描写は読み取ることが出来ず、また光背の有無も不明である。

## Ⅱ 背景部分—共裏について

修理前調査時より指摘される本紙の背景部分と如来像周りの不自然な差異のある箇所については、作業開始後本紙の旧裏打ち紙を除去して確認した結果、背景部分と本紙とは全く別物の絹布であることが判り、当初の予想通り「共裏」<sup>2</sup>であることが確認された。本作品の作画当初からのオリジナル部分は、如来像の像様(身体)部分とその周辺一回りのみで、共裏絹が一層重ねられたために、本紙本来の如来像部分は共裏一層分の厚みを余分に増していた(図3)。

共裏から除去した旧裏打ち紙には、共裏絹目から漏れて付着した墨の痕がしっかりと残されており(図4)、裏打ち作業後一すなわち旧修理段階以降一に本紙表面から墨塗られた事が判る。

不必要に墨塗りされた点もあり、除去する方針の共裏絹については、後補でありながらも長らく本紙上の背景として見慣れて来たこれまでの経緯を慮り、所有者(教圓寺)に除去の旨了承を取ってから、共裏絹を全て除去した(図5)<sup>3</sup>。除去後の本紙の様相は、元の本紙である如来の像様(身体)部分および周辺の輪郭が刃物による切り抜きと見受けられるなど、人の手によって削り貫かれた跡であることが分かる(図6)。



図3：修理前本紙構造イメージ



図4：旧裏打ち紙に付着した墨痕



図5：共裏の除去作業



図6：共裏除去後本紙裏面（透過光写真）

### Ⅲ 過去の修理歴について

本作品が収められていた元箱の蓋板裏<sup>4</sup>（図7）には下記の墨書があり、宝永二年（1705）<sup>5</sup>に修理歴があった事が判る。

尾州愛知郡岩作村東沙山教圓寺本尊恵心僧都御筆

再表具想檀方村中勸化

宝永貳乙酉年四月 住持念教代化主本光露心居士 俗名加藤四郎右衛門

墨書文中「恵心僧都御筆」<sup>6</sup>とあり、寺伝<sup>7</sup>でも恵心僧都の作と伝えられてはいるが、実際の所は不明であり、本作品の仏像様式や施された金箔戴金模様等の美術史的研究が待たれる。ただ宝永二年（1705）に修理が施されたことについては、事実作品からその痕跡が確認された。ここからは推測になるが、おそらくその旧修理の時点ですでに如来像背景の損傷が進行しており、宝永年間の修理者は肝心の本体部分を削り貫いて残し、背景を別布で共裏としてカバーすることを選択した。そしてその境目を誤魔化するために像周りを墨塗りしたと推測される。しかし、剥ぎ取られた部分に、あるいは墨塗られた下に描かれていたものについては、今は誰も知り得る事ができない。



図7：元箱蓋裏

<sup>1</sup> 仮張り板とは、障子に用いられるような組子下地に和紙で何層にも下貼を施し、表面に柿渋液を塗り重ねて乾燥させたもの。装演技術に欠かせない道具の一つで、この仮張り板に貼って（「仮張り」）乾燥させることにより、ピンと張った状態にすることが出来る。

<sup>2</sup> 「共裏」とは、広範な本紙欠損部などの補填を兼ね、肌裏の代用として同質素材が用いられ裏打ちされることにより、部分的に本紙上に表出する裏打ち媒体。本作品《阿弥陀如来図》では本紙よりも粗い絹目で厚手の絹布が用いられていた。

<sup>3</sup> なお共裏絹除去後は、元の本紙（如来身体）部分を除けた空白部分にのみ、本紙と同質の新たな絹で補絹・補彩を施した。

<sup>4</sup> 元箱は被せ箱。本修理にて新たな桐屋朗箱を新調したため、元箱の天板箱書部分を板状に繰りぬいて、新調した桐箱底に敷いて収めた。

<sup>5</sup> 「宝永貳乙酉年」、宝永二年の干支乙酉は、西暦1705年に等しい。

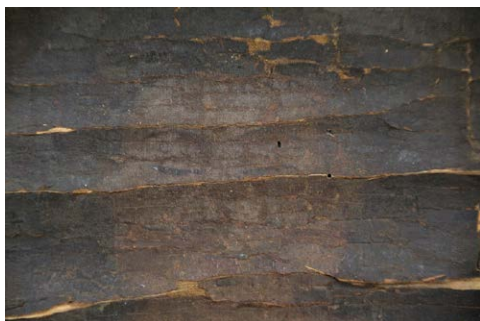
<sup>6</sup> 恵心僧都源信（942～1017）は平安時代中期の天台宗僧侶。『往生要集』などを著し、その後の浄土宗信仰に大きな影響を与えた。

<sup>7</sup> 樋口好古著『郡村徇行記』（1792～1822成立）の内「尾張徇行記」第3巻に教圓寺に関する記述が有り、本作品と併せて二幅の恵心僧都作「弥陀ノ画」の存在を示す。





修理前



修理前（頭部）



修理後



修理後（頭部）